

言葉は文化とは切っても切れない関係性を持つている。日本語一つを取って見ても、この小さな国でいくつもの方言が存在し、土地に根付いた表現が現在でも使われている。同様に、どの言語にも、その土地独特の表現が存在している。日本語の「もつたいない」という言葉が新たな概念としてSDGsの議論の中で取り上げられたこともあるし、東日本震災以降はTSUNAMIが英語として世界中で使用されるようになった。これはつまり、言語とはそれが使用される地域や社会で成長し、発展を遂げ、グローバル化の中で交わり、広がっていくものだ、ということである。

英語の多様性

り、20億人もの英語ユーザーが存在しているといわれている。英語は国際共通語であり、世界中とつながることのできるツールである。そんな英語のリンガフランカ(国際共通語)としての役割はすでに日本全体に認識されているだろう。だが、英語ユーザーの大半が母語話者ではなく第2、第3言語話者である、という事実はこのくらい認識されているだろうか。

また、これだけ広大な範囲に広がった英語は、それぞれの地域や社会、言語に合わせて変化を続けている、という事実はこのくらい認識されているだろう。今や英語は単数形ではなく、複数形で語られるべきだ、というのが「世界諸英語(World Englishes)」の考え方である。アメリカ英語、イギリス英語だけでなく、インド英語、フィリピン英語、韓国英語、そし

シオンは、一方通行なものではなく相互的なものであり、20億人の多様な英語を理解し、また自分を理解してもらう能力が必要なのだ。それでも、英語教育の現場に立って聞こえてくる声は今も変わらず「ネイティブみたいになりたい」である。

また、「私は発音が悪いし、話せない」という声もよく聞く。多くの場合、「ネイティブ」はアメリカ人をはじめとする第1言語話者を意味するし、「発音が悪い」は「ネイティブの発音とは違う」ことを意味する。英語の正解は1種類しかなく、「違い」は「間違い」である、という認識のように聞こえる。

でも世界には何通りも英語があるのだ。その違いは発音にも文法にも表現にも表れているし、その違いは「間違い」ではなく慈しむべき「特徴」なのだ。「アメリカ人に」ではなく、「アメリカ人にも」通じる英語の習得を目指すべきだし「アメリカ人の英語を」ではなく、「アメリカ人の英語」も「理解できる能力を身につけるべきなのだ。」やり取りの相手は世界中にいる、そして自分を含めそれぞれに尊重すべきバックグラウンドがある、という多様性を意識した英語教育を進めていくことで、「英語ができない日本人」ではなく、「誇りをもって「日本を英語で語れる人」というグローバル人材が育つのではないだろうか。そのためには、「英語ではそんな言い方はしない」ではなく、「今のはとても日本らしい表現だったね」と認められる教育が必要である。

「違い」は「間違い」ではない

さて、英語について考えてみよう。英語は世界の100以上の国や地域で公用語としての役割を担っており



名城大学 外国語学部 准教授
池 沙弥

いけさや 社会言語学、World Englishes。メルボルン大学(オーストラリア)博士課程修了。

て日本英語というように、その土地の文化と言語を吸収し、成長したさまざまなかたちの英語が世界中に存在するのである。

文部科学省は「小中高を通じて、コミュニケーション能力を育成」を基本的考え方としているし、小学校英語教育でも「読む・書く・聞く・話す」だけでなく「やり取り」を含めた五つの領域での英語目標が設定されている。コミュニケーション

